| 研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書，学術論文等の名称 | 単著，共著の別 | 発行又は発表の年月 | 発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称 | 概　　要 |
| （著書(欧文)） | | | | |
| 1. Międzynarodowe Aspekty Powstania Warszawskiego 1944 roku (国際的な視点から見た1944年のワルシャワ蜂起) | 共著 | 2004年12月 | Oficyjna Wydawnicza RYTM (ワルシャワ / ポーランド) | P. 139～P. 142 を担当 (Echa Powstania Warszawskiego w Japonii. 「日本におけるワルシャワ蜂起の反響」) (編者　Marian Drozdowski　分担執筆　Michihiro Yasui, Maciej Kwiatkowsk, Sebastian Fikus, Krzsztof Popiński, Tomasz Głowiński, Wiktor Poliszczuk, Karoly Kapronczaj, Eugeniusz Duraczyński その他9名.)<br>本書は、第二次世界大戦中、ドイツ占領下のワルシャワにおいて勃発したポーランド市民による反ドイツ蜂起をめぐる国際的な反響ないし影響についての国際比較を試みた共同研究の成果である。担当の論説では、日本におけるワルシャワ蜂起に対する反響を日本の主要な新聞・雑誌のみならず、宇垣一成や重光葵ら、軍人、政治家、外交官の日記・回想・書簡、さらには作家の伊藤整や仏教的社会運動家の妹尾義朗など様々な立場の知識人の残した史料の中に探り、ドイツの同盟国でもある日本社会においては、この蜂起について独特な理解・解釈がなされていたことを解明した。また蜂起の問題とも合わせて、1944年当時における日本知識層における国際関係認識についても特徴の一端を明らかにした。 |
| 2. Гісторыя Беларусі ў XX Стагоддзі / History of Belarus in XX Century | 共著 | 2017年11月 | ЮрСа Прынт (フロドノ / ベラルーシ) | P. 32～P. 60を担当（”Hromada's Day” in the Polish Sejm (Feb. 4, 1927): The Belarusian national movement under the early Sanacja Regime).<br>(編者 Aliaksandr Gorny、分担執筆Michihiro Yasui, Aliaksandr Gorny, Siarhiej Pivavarchyk, Sviatlana Silava, Viktar Bielazarovich, Sviatlana Marozava, Edmund Jarmusik, Andrej Gecevich, Vital Harmatny, Jan Traciak, Aliaksandr Savich, Vital Kryvuc, Aliaksandr Tsimbal, Aliaksandr Ilyin 他 10名)<br>両大戦間期においてベラルーシ民族運動の中核を担ったベラルーシ労農同盟フロマダは、ベラルーシの歴史においてのみならず、東中欧近現代史において重要なテーマである。本書はフロマダの綱領発表90周年を機に企画された国際共同研究の成果である。担当部分では、ベラルーシ民族運動の大きな転機となった1927年にポーランドで起こったベラルーシ民族運動の弾圧について検討した。本稿では、この出来事の経緯を丹念に描き出すとともに、イギリス議会での議論をはじめ、この出来事をめぐる国際的な反響についても考察を試みている。 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 3. | Mediterranean Cities: Mobility and displacement | 共著 | 2021年12月 | Institut d'Estudis Catalans<br>(バルセロナ ) | P. 247～P. 253を担当（”A long road to Italy: The Odyssey of the Polish warriors during the Second World War)<br>(編者 Frocel Sabaté、分担執筆 Michihiro Yasui, Marco Accorinti, Oriol Amorós, David Asensio, Gemma Aubarell, Jordi Bayona, Gian C. Blangiardo, Corrado Bonifazi, Moussa Bourekba, Maria E. Cadeddeu, Àngel Casals, 他 37名）<br>第二次世界大戦の勃発後、ソ連領に抑留されることになったポーランド軍兵士は、やがて独ソ戦が開始されるとドイツと戦う軍事力として再編成された。しかしソ連軍の指揮下に入ることを拒んだことから、ソ連はこの数万規模の軍事力の処遇に窮した。結局、ポーランド軍とその家族はソ連領を退去し、中央アジアを経て中東、地中海沿岸へと移動し、その後イタリア戦線で連合国の一員として同国の解放に貢献する。とりわけモンテ・カシノの攻防戦では多くの犠牲を出しながら連合軍の勝利に寄与したポーランド人部隊の活躍は、現代においてもポーランド人の重要な国民的記憶となっている。本稿は、第二次大戦期のイタリア戦線に至るまでのポーランド人兵士の足跡を辿りながら、地中海における人の移動の歴史の一齣を紹介しつつ、このポーランド人部隊をめぐる物語の中に大戦前のポーランドが抱えていた少数民族問題が影をおとしている側面にも着目し、この物語が現代においてもなお生き続けるポーランド人の少数民族に対するステレオタイプを再生産する機能をもはたしている点を指摘した。 |
| 4. | Wędrówki po dziejach. Księga jubileuszowa dla profesora Tadeusza Stegnera.<br>（歴史逍遥：タデウシ・ステグネル教授古稀論集）<br>（査読有） | 共著 | 2022年10月 | Wydawnictwo Uniwer-sytetu Gdań skiego<br>（グダニスク大学出版会 / ポーランド） | P. 443～P. 479を担当（"The European Nationalities Congress in the Eyes of Polish Jewry”）<br>(編者 Iwona Janicka & Arkadiusz Janicki、分担執筆 Michihiro Yasui, Krzysztof Kł odawski, Roman Jurkowski, Grzegorz Jasiński, Igor Hałagida, Regina Renz, Grzegorz Berendt, Magdalena Nowak 他、計36名<br>ヨーロッパ民族会議は、少数民族問題に揺れた両大戦間期のヨーロッパで、国際連盟を補完する機関の設立を期す各国の少数民族によって1925年に設立され、1938年まで毎年大会を開催して少数民族についての議論が行われたユニークな経験である。自らの国家をもたず連盟に代表をもたない、各国のユダヤ人が同会議に寄せる期待にはとりわけ強いものがあった。その中で、ヨーロッパ最大のユダヤ人口を擁するポーランド・ユダヤ人の動向は注目されたが、民族会議へのその対応は総じて否定的なものであった。こうした対応の背景にあるポーランド・ユダヤ人の側の事情にも目を向けつつ、民族会議とポーランド・ユダヤ人との関係を検討した。 |

| （著書(和文)） | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1. クロニック世界全史 | 共著 | 1994年11月 | 講談社 | P. 396, 483, 461, 505, 553, 590, 593, 618, 626, 656, 666-667, 671, 675, 745, 775, 784, 873, 885, 894, 951, 972, 1002, 1004-1005, 1016-1017, 1047, 1073, 1101 を担当　(ハプスブルク帝国の解体、第二次世界大戦の勃発など27項目)　編者 樺山宏一、木村靖二、窪添慶文、湯川武 分担執筆　安井教浩、川田順三、佐藤彰一、鈴木董、外川継男、富田虎男、福井憲彦、森洋子、家嶋彦一、他160名。<br><br>世界史上の重要事件を年度ごとに見開きの頁に収め、各地域の出来事を俯瞰するというコンセプトのもとに編纂された本書で、近現代を中心とする諸項目を執筆した。一般の読者を対象としたものではあるが、厳密な史料批判と東欧民主化後における歴史学の新しい動向を踏まえた叙述となっている。 |
| 2. ポーランド史論集 | 共著 | 1996年12月 | 三省堂 | P. 275～P. 311を担当 (帝政ロシア第一・第二国会におけるポーランド人: ふたつの議員団)　編者 阪東宏、分担執筆　安井教浩、井内敏夫、山田朋子、神代光朗、早坂真理、田口雅弘、光吉淑江、イェジィ・スコブロネク、イレネウシ・イフナトーヴィチ、ヤン・カンツェーヴィチ、アンナ・ジャルノフスカ、フェリクス・ティフ、アンジェイ・ガルリツキ、イザベラ・ルシノーヴァ<br>ポーランドと日本のポーランド史専門家15名による個別の論文集。担当部分において、ロシア帝国最初の議会において議席のほぼ1割を占め、初期のロシア議会政治の重要な一角を担ったポーランド人の政治活動の分析を試み、その特質を明らかにした。本稿の特色としてとりわけ指摘しうるのは出身母体を異にするふたつのポーランド議員団それぞれの論理に沿いながら検討を試みていること、そしてこれら両議員団の動向を、三国協商の成立など、当時のヨーロッパ政治との関連性に留意しながら考察を行っている点である。 |
| 3. 「ヨーロッパの歴史」を読む | 共著 | 1997年1月 | 東京学芸大学<br>海外子女教育センター | P. 99 ～P. 111 を担当 (中東欧におけるヨーロッパ史と国民史の相克 - ポーランド語版『ヨーロッパの歴史』の場合)　分担執筆　*安井教浩*、木畑洋一、近藤孝弘、足立信彦、中嶋茂雄、安達かおり、土浪博、芝健介、佐伯哲朗、鳥越泰彦、原聖、河原温、新原道信<br>欧州共通教科書を目指して編纂された『ヨーロッパの歴史』の自国語版を、東欧諸国の中でいち早く刊行したポーランドの事例を取り上げ、ポーランド語版と原版であるドイツ語版およびフランス語版との綿密な比較を行なった。その結果、西欧中心的な原版の内容に対する強い反発から、ポーランド語版ではポーランド国民史の立場を色濃く反映した修正が施されていることが明らかとなった。本稿ではその修正のありようを具体的に検証しつつ、EUにおける自国史と普遍史 (ヨーロッパ史)との相克の様相について考察した。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 4. ポーランド学を学ぶ人のために | 共著 | 2007年3月 | 世界思想社 | P. 42～P. 66 を担当（第三章　ポーランド国境をめぐる理想・構想・現実）　編者　渡辺克義、分担執筆　安井教浩、小山哲、白木太一、吉岡潤、家本博一、クシシュトフ・カロルチャク、西野常夫、臼井裕之、加須屋明子、加藤久子<br>ポーランドの歴史、政治、文学、音楽、絵画等、学術性を担保した総合的な案内書。とりわけ歴史の紹介に重きが置かれている担当部分では、第一次大戦の戦後処理における最重のひとつポーランド国境の画定問題をめぐる国際政治上の力学を、ポーランドの諸勢力、連合諸国それぞれの構想や思惑を絡めながら多面的に考察し、ヨーロッパにおける領土の可変性に読者の注意を促す問題提起を行った。 |
| 5. 世界史史料 第10巻 20世紀の世界Ⅰ：ふたつの世界大戦 | 共著 | 2006年12月 | 岩波書店 | P. 67～P. 68、P. 137～P. 138 を担当　（第一章の40　ポーランドの独立（1918年11月）、第二章の80　ピウスツキのクーデタ　（1926年5月））<br>編集者 斉藤治子、久保亨、分担執筆 安井教浩、他多数<br>20世紀前半の世界史について理解するうえで重要な史料を各国語の原典から翻訳し、註解を加えたもの。 |
| 6. 世界史史料 第11巻 20世紀の世界Ⅱ：第二次世界大戦後・冷戦と開発 | 共著 | 2012年5月 | 岩波書店 | P. 335～P. 337 を担当（第四章第六節 ポーランドにおける「連帯」の誕生（1980年））　編者 久保亨、油井大三郎、後藤政子、斉藤治子、小沢弘明、木畑洋一、伊集院立、分担執筆 安井教浩、他多数<br>第二次世界大戦後の世界史について理解するうえで重要な史料を各国語の原典から翻訳し、註解を加えたもの。 |
| 7. リガ条約：交錯するポーランド国境 | 単著 | 2017年12月 | 群像社 | 総頁数132頁、カラー口絵4頁<br>第一次大戦後に勃発したポーランド・ソ連戦争を終わらせ、両国の国境を定めたリガ条約（1921年3月）は、戦間期ヨーロッパの政治地図を最終的に確定させた条約として、国際関係史上、極めて重要な位置を占めている。本書は、この条約をポーランド・ソ連両国の政治外交史のレベルにおいて論じるだけでなく、同条約が周辺の諸国や諸民族に及ぼした影響、とりわけ同条約によって引き裂かれたリトアニア、ベラルーシ、ウクライナに居住する諸民族への影響についても検証し、この条約のもつ意味をより広い文脈の中で問い直そうとしたものである。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 8. ポーランドの歴史を知るための56章【第2版】 | 共著 | 2023年<br>(刊行予定) | 明石書店 | 担当：第23章 「戦間期ポーランドの政治」(頁は不詳) 編者 渡辺克義、白木太一、吉岡潤 / 分担執筆 安井教浩、荒木勝、小山哲、、家本博一、他22名。<br>ポーランドの歴史について、通史編とテーマ編の計56章からなる総合的な案内書。そのうち通史編の戦間期の政治を担当・執筆し、「議会の専横」ないし「政党の跳梁跋扈」という否定的なイメージで語られてきた1920年代のポーランド議会政治の歴史について、実際にはどのような時代であったのか、同時代の証言を交えながら紹介した。 |
| (学術論文(欧文)) | | | | |
| 1. Leon Reich (1879-1929)<br>Sylwetka przywódców syjonistów w Galicji Wschodniej<br>(ポーランド語論文)<br>「レオン・ライヒ 1879-1929: 東ガリツィア・シオニスト指導者の肖像」<br>(査読有) | 単著 | 2013年3月 | Polish Biographical Studies<br>創刊号<br>シュチェチン大学 ポーランド | 第二次世界大戦前のヨーロッパで最大のユダヤ人口を擁したポーランドにおけるシオニストの指導者として、また国際シオニズム運動における主要な幹部として、レオン・ライヒは近代ユダヤ史において大きな役割を演じた。しかしながら、その早すぎる死によって、その後正当な評価を受けることなく、一般には忘れられた人物となっている。本稿は、ユダヤ史において重要な位置を占め、ポーランド人との共生を模索しつづけたこの人物の思想と行動にはじめて光を投げかけたものである。 (p. 59～p. 84) |
| 2. Ex Lux Oriente: Roman Dmowski w Japonii<br>(ポーランド語論文)<br>「光は東方より：ローマン・ドモフスキの日本滞在」<br>(査読有) | 単著 | 2014年12月 | Nowa Polityka Wschodnia<br>「新しい東方の政治」<br>通算第6号 (2014年第1号)<br>東方研究センター トルン (ポーランド) | 日露戦争のさなか、ロシアの統治下におかれているポーランドの政治状況を打破するため、ポーランドの民族主義者ドモフスキが日本を訪れたことは、ポーランド近代史上、極めて有名なエピソードである。しかし、日本での経験が、ドモフスキのその後の思想的展開にどのような影響を及ぼし、ひいてはポーランド・ナショナリズムの形成過程においていかなる刻印を残すことになったのかという問題については、これまで本格的な考察が行われてこなかった。ポーランド語で著された本稿は、四国松山の捕虜収容所の訪問をはじめとするドモフスキの日本体験が、その後の彼の思想に及ぼした影響について分析した。 (p. 241～p. 253) |
| 3. Беларусі і яў рэі ў Парламенце Польшчы ў 1922–1927 г.<br>(ベラルーシ語論文)<br>「ポーランド議会のベラルーシ人とユダヤ人 1922-1927年」<br>(査読有) | 単著 | 2015年12月 | Беларускі Гістарычны Агляд<br>「ベラルーシ歴史評論」第22巻<br>European Humanities University<br>ヴィルニュス (リトアニア) | 本稿は、ポーランドにおいてともにマイノリティーの立場におかれ、ともに議会政治を通じて民族的諸権利の獲得を目指したベラルーシ人とユダヤ人の連帯の模索とその挫折の過程を、一次史料に依拠しながら跡づけようと試みたものである。ポーランドの「ベラルーシ人問題」と「ユダヤ人問題」は、国外のそれぞれの同胞組織や近隣諸国の思惑も絡んで容易に国際問題化する性格を帯びていた。本稿では、国内的な視点と国際的な視点とを交錯させつつ、両民族の動向を考察した。 (p. 125～p. 151) |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 4. Беларусы і Кангрэс нацыянальных меншасьцяў Зўропы ў 1925-1938 гг.<br>(ベラルーシ語論文)<br>「ベラルーシ人とヨーロッパ民族会議 1925-1938年」<br>(査読有) | 単著 | 2019年12月 | Беларускі Гістарычны Агляд<br>「ベラルーシ歴史評論」第26巻<br>University of Warsaw.<br>Center for East European Studies.<br>ワルシャワ<br>(ポーランド) | 1925年に設立された「ヨーロッパ民族会議」は、ヨーロッ諸国の少数民族が一堂に集い、少数派の権利向上を目指した少数民族連帯の試みであった。同会議の歴史はこれまで主としてドイツ人の動向を中心に描かれがちであったが、そうした固定的なイメージを問い直すためにはドイツ人以外の民族それぞれについても内在的な論理に沿いながら検討することが求められている。民族会議をめぐるベラルーシ人の行動の論理を考察した本稿は、上記の課題に対する一つの試みである。（p. 119～p. 149） |
| （学術論文（和文）） | | | | |
| 1. ローマン・ドモフスキにおける「国民民主主義」思想: ポーランド・ナショナリズムの転回<br>（修士論文） | 単著 | 1989年3月 | 明治大学<br>文学研究科 | かつて東欧の大国でありながら、18世紀の末、近隣の3つの強国による分割のために国家の滅亡を味わい、その後も祖国の復興を求めて幾度となく蜂起に立ち上がりながらも、その都度過酷な抑圧を経験したポーランドでは、とりわけ特徴的なナショナリズムが形成されることになった。本稿は、ポーランドにおける近代的ナショナリズムの源流とされる「国民民主主義」の思想的特質を、その理論的指導者ローマン・ドモフスキが19世紀後半から第一次世界大戦前夜にかけて著した主要な著作を手がかりとして解明しようとしたものである。(総頁数 180頁、400字詰原稿用紙換算203枚) |
| 2. ルムコフスキの物語 | 単著 | 1994年8月 | 「フラタニティー」<br>第3号<br>明治大学西洋史研究会 | 第二次世界大戦中、ドイツ占領下に置かれたポーランドで、ワルシャワ・ゲットーとともに最大規模を誇ったウッチ・ゲットーのユダヤ評議会議長として辣腕をふるい、ゲットー内に厳密な統治を布いたことから「専制君主」とも称されたハイム・ルムコフスキは、ホロコーストの歴史においてその評価が最も難しい人物のひとりとされてきた。本稿では、最新の研究を踏まえて、この知られざる人物の生涯を紹介した。（p.82～p.90） |
| 3. ローマン・ドモフスキにおける民族と国家 | 単著 | 1995年3月 | 「駿台史学」<br>第94号<br>駿台史学会 | ポーランド・ナショナリズムを理解する上で欠くことのできないローマン・ドモフスキにおける国家観・民族観の変遷について考察を試みた。とりわけ本稿の特徴として指摘しうるのは、祖国の喪失と3つの国家により一世紀余にわたって分割支配されるという特殊な状況の中でドモフスキが提起した「内なる統治」という構想に目を向け、その内実を明らかにしている点、そして彼の民族概念が純化されていく過程において、日露戦争勃発に伴う彼の日本訪問および日本での体験が彼の思想的展開に及ぼした影響を解明している点である。（p. 24～p. 57） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 4. ポーランド・ナショナリズムの形成: ドモフスキ「近代的ポーランド人の思想」をめぐって<br>(査読有) | 単著 | 1997年3月 | 「東欧史研究」<br>第19号<br>東欧史研究会 | ポーランド政治思想史上、「ポーランド・ナショナリズムの経典」とも称されるローマン・ドモフスキの代表的著作「近代的ポーランド人の思想」を詳細に分析し、彼の独特なポーランド人観を、当時の政治的・社会的文脈の中で理解することに努めた。また、同書に現れる言説を、同時代の他の政治文献との比較の中で吟味し直し、ポーランドの政治思想史におけるドモフスキの位置についても再検討を行った。<br>（p. 5～p. 28） |
| 5. 1925年の「ウゴダ」（合意）：ポーランド政府の論理とユダヤ議員団の論理<br>(査読有) | 単著 | 2001年12月 | 「現代史研究」<br>第47号<br>現代史研究会 | 第二次世界大戦前、ヨーロッパ諸国中最大の300万人ものユダヤ人口を擁したポーランドで、戦間期を通じて、ポーランド・ユダヤ両民族の共存・共生が真摯に模索された唯一の事例である1925年の「合意」について、その交渉の過程、合意成立から挫折に至る経緯を詳細に跡づけた。そして、この問題をめぐるポーランド政府と、ユダヤ人社会を代表していたポーランド議会のユダヤ議員団双方の論理や思惑、またそれぞれの内部での相克など、様々な要因に目配りしながら、この「合意」についての多層的な像を描き出した。<br>（p. 47～p. 65） |
| 6. ポーランドの政治言語における「ユダヤ人」：<br>1922年の大統領暗殺前夜の場合<br>(査読有) | 単著 | 2003年12月 | 篠田知和基編<br>「神話・象徴・文学」<br>第3号<br>楽浪書院 | 1922年12月、独立後のポーランドで初の大統領選挙が合同議会で実施され、大方の予想に反し、左派と民族的少数派の票を獲得した候補が、本命と目された右派の候補を破って当選したが、これを不満とする右派政治家や支持層は、ユダヤ人の策謀として反大統領キャンペーンを展開した。首都での騒擾が続く中、新大統領は就任後わずか数日にして、狂信的な右派支持者によって暗殺される。戦間期ポーランドにおけるユダヤ人問題の重要な転機ともなる、この大統領暗殺前夜の反ユダヤ的風潮の中では様々な政治的言説が現れたが、本稿は、同時代の新聞・雑誌をはじめとする諸種の史料にあたり、「ユダヤ人」に表象される政治的含意について検討を行った。（p. 283～p. 333） |
| 7. 両大戦間期ワルシャワの政治文化: ユダヤ人との共生と反ユダヤ的風潮のはざまで | 単著 | 2007年12月 | 「フォーラム・ポーランド2007年会議録」<br>フォーラム・ポーランド | 35万とも40万とも言われるユダヤ人口を擁した戦間期のワルシャワは、まさしくイディッシュ文化の一大中心地であった。しかし、ユダヤ人口の多さゆえに、首都は、しばしば反ユダヤ主義のうねりにおおわれることにもなった。本稿は、ワルシャワのユダヤ人の歴史を概観するとともに、ともに大きな反ユダヤ騒擾を惹起することになった1912年のロシア国会選挙と1922年の大統領選挙後の首都の様相について比較考察を試みたものである。（p. 29～p. 32） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 8. ポーランド・シオニズムの統合問題: 1920年代を中心に | 単著 | 2013年12月 | 「ユダヤ・イスラエル研究」<br>第27号<br>日本ユダヤ学会 | ポーランド・ユダヤ人について論じる場合、1世紀余におよぶポーランド分割の歴史が、この地域に居住するユダヤ人の間にも、分割領ごとの政治文化の相違を生み出していた点に留意する必要がある。独立を回復した戦間期のポーランドにおいて、ユダヤ人の政治を主導したシオニストもまた、分割期の経験に起因する内部の分裂を抱えており、それを克服し、政治的な力の結集を図るという課題を抱えていた。そこで本稿は、1920年代におけるポーランド・シオニズム諸勢力の統合の試みを検証した。そして、ディアスポラの政治とパレスチナの建設というシオニズムのふたつの重要課題が、ポーランド・シオニストにおいてはどのように理解されていたのかを明らかにし、ポーランド・シオニズムの特質を析出した。（p. 64～p. 71） |
| （紀要論文） | | | | |
| 1. 第二共和政ポーランドにおける議会政治の幕開けと民族的少数派: 東ガリツィア・ユダヤ人の選択 | 単著 | 2007年12月 | 「長野県短期大学紀要」<br>第62号<br>長野県短期大学 | 第一次世界大戦後のポーランド独立後も、旧オーストリア領ポーランドの東部地域（東ガリツィア）は、ウクライナ人とポーランド人と抗争がやまず、その国家的帰属が定まらないでいた。そうした状況の中で、同地域に居住するユダヤ人は、いかなる政治的な立場をとるべきかという問題をめぐって苦悩するが、やがて同地域のポーランドへの帰属がほぼ確定し、ポーランドにおける本格的な議会政治の幕開けを告げる1922年11月の議会選挙が決まると、ウクライナ人の選挙ボイコットを尻目に選挙への参加に踏み切る。本稿は、東ガリツイア・ユダヤ人の政治行動を丹念に追いつつ、多民族地域における共生の問題、とりわけ多民族国家における議会政治のあり方というテーマについて考察した。（p. 137～p. 151） |
| 2. 第二共和政ポーランドにおける議会政治の幕開けと民族的少数派: 東ガリツィア・ユダヤ人の選択（2） | 単著 | 2009年12月 | 「長野県短期大学紀要」<br>第64号<br>長野県短期大学 | ポーランド議会政治の場での諸権利獲得という選択を行った東ガリツイア・ユダヤ人の宣教活動と選挙結果、そして議会に入って後の政治活動を検討した。とりわけ、議会内で「ユダヤ議員団」を結成する過程、大統領選挙に際しての行動を詳細に追い、東ガリツイア・ユダヤ人の政治行動の特徴を、ユダヤ人の政治全体の脈絡の中で、さらには他の少数民族の動向も交える中で、明らかにしようと努めた。<br>（p. 137～p. 154） |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| （辞書･翻訳書等） | | | | |
| 1. アントニー・ポロンスキ「小独裁者たち: 両大戦間期の東欧おける民主主義体制の崩壊」 | 共訳 | 1993年2月 | 法政大学出版会 | 第1章「 ポーランド」（p. 30～p. 59）を担当<br>監訳者 羽場久美子、分担者 安井教浩、越村勲、篠原琢、 |
| 2. 阪東宏「ポーランド史論集」 | 共訳 | 1996年12月 | 三省堂 | ヤン・カンツェーヴィチ「ポーランド社会党とブントの論争1902-1903年: ユーゼフ・ピウスツキの役割を中心に」（p. 30～p. 46）を担当 |
| （報告書･会報等） | | | | |
| 1. 書評論文：伊東孝之「ポーランド現代史」（山川出版社､昭和63年）<br>(査読有) | 単著 | 1989年12月 | 「東欧史研究」<br>第12号<br>東欧史研究会 | 連帯運動についての詳しい叙述を含み、日本人の手に成る本格的なポーランド現代史である本書の特徴点について、補完的な説明を加えつつ、その意義を論じた。（p. 108～p. 111） |
| 2. ポーランド: 自由化の夢と現実 | 単著 | 1992年2月 | 「歴史地理教育」<br>第483号 | 東欧における一連の変革の先駆けとなった1989年夏の「連帯」主導内閣から91年夏までの2年間に起こった政治・経済の変動期をポーランド市民はどのように生きたのであろうか。この問いに対して、この時期にポーランド留学中であった著者が自らの見聞を踏まえながら、ひとつの回答を試みた。（p. 56～p. 61） |
| 3. ポーランドの文書館について<br>(査読有) | 単著 | 1995年12月 | 「現代史研究」<br>第41号<br>現代史研究会 | 1989年以降の体制転換を経て、歴史家にとっては欠くことの出来ない史料を保管する文書館をめぐる事情はどのように変化したのか、大きく様変わりしつつあるポーランド歴史学の最新の動向も交えて紹介した。<br>（p. 67～p. 71） |
| 4. 2008年の歴史学界:<br>回顧と展望 | 共著 | 2009年5月 | 「史学雑誌」<br>第118編 第5号<br>史学会<br>（山川出版社） | 「ヨーロッパ 現代（ロシア・東欧・北欧）」（p. 376～p. 381）を担当<br>分担者 安井教浩、村井章介、岡本充弘、森崎一貴、高橋健、鐘ヶ江賢二、忽那敬三、小田裕樹、坂上康俊、堀江潔、他102名 |
| 5. 書評論文：宮崎悠『ポーランド問題とドモフスキ国民的独立のパトスとロゴス』（北海道大学出版会、2010年）<br>(査読有) | 単著 | 2012年3月 | 「西洋史学」<br>No.244<br>日本西洋史学会 | 日本において単行本として初めて刊行されたドモフスキ研究である本書のもつ意義と課題について論じた。（p. 70～p. 72） |

| （国際学会発表） | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1. Echa Powstania Warszawskiego w Japonii.<br>（ワルシャワ蜂起の日本における反響） | 単独 | 2004年<br>6月15日 | ポーランド科学アカデミー主催国際学術会議「国際的な観点から見たワルシャワ蜂起」<br>王宮の会議の間<br>（ワルシャワ / ポーランド） | 日本におけるワルシャワ蜂起に対する反響を、日本の主要な新聞・雑誌のみならず、宇垣一成や重光葵ら、軍人、政治家、外交官の日記・回想・書簡、またその他の一般の知識人の日記などの中に探り、ドイツとの同盟国で会った日本の社会においては、ワルシャワ蜂起について独特な理解のなされ方が行われていた点について報告を行った。 |
| 2. Roman Dmowski w Japonii: doświadczenia "nowoczesnego Polaka" w "Kraju Wschdzącego Słońca"<br>「ローマン・ドモフスキの日本滞在:『近代的ポーランド人』の『日出ずる国』体験」 | 単独 | 2012年<br>10月18日 | アダム・ミツキェーヴィチ大学主催国際学術会議「19・20世紀の在外ポーランド人」<br>アダム・ミツキェーヴィチ大学歴史学部118番ホール（ポズナン / ポーランド） | 日露戦争開始後まもなく、ポーランド問題をめぐる政治的な動機から日本を訪れたポーランドの民族主義的な政治活動家ローマン・ドモフスキは、ふた月あまりの滞在中、児玉源太郎と会談したのをはじめ、軍人、外交官など多くの日本人と接して、日本人の思考や態度、文化に鮮烈な印象をうけた。それは、ポーランド・ナショナリズムの始祖とされる彼のその後の思想的な展開にも大きな影響を及ぼした。本報告では、ドモフスキの日本における知的経験に光をあて、日本での経験が彼の思想にどのような影響を及ぼしたかについて報告を行った。 |
| 3. The European Nationalities Congress and the National Minorities in Poland 1925-1938. | 単独 | 2016年<br>3月18日 | ポーランド学術高等教育省「人文学の発展のための国家的プログラム採択研究」<br>国際学術ワークショップ<br>ヴロツワフ大学歴史研究所<br>(ポーランド) 108番ホール | 1925年に設立され、1938年まで毎年開催された「ヨーロッパ民族会議」は、「少数民族の議会」ないし「少数民族の国際連盟」とも呼ばれ、戦間期のヨーロッパ諸国の少数民族の代表たちはそこに一堂に会し、それぞれの民族的な諸権利を獲得するための方途について議論を交わした。本稿では、いまだ十分には解明されていないこの会議の構造・性格を明らかにするとともに、会議の中核をなしたドイツ人グループとユダヤ人グループとの関係に留意しつつ、戦間期のヨーロッパにおける少数民族連帯の試みの意義と限界について考察した |
| 4. Social and Economical life in the Eastern Boederland of Inter-war Poland: Konstanty Srokowski's Report and its Effects. | 単独 | 2017年<br>6月17日 | ポーランド学術高等教育省「人文学の発展のための国家的プログラム採択研究」<br>国際学術ワークショップ<br>ヴロツワフ大学歴史研究所<br>(ポーランド) 13番ホール | K.スロコフスキは、1923年はじめ、ポーランド首相S.シコルスキの依頼を容れて、東部地域における少数民族問題の現状を現地に赴いて調査し、その後、報告書を提出した。だが、シコルスキ内閣がまもなく倒壊したために、首相がそれを参考に少数民族政策を立案する予定であったスロコフスキ・レポートは、その後の政府によって取り上げられるところはならなかった。しかし書物として刊行されたK.スロコフスキの分析と提言は、その後、少数民族の側からは高い評価をうけ、その後の少数民族問題の帰趨に一定の影響をもちつづけることになった。本報告では、多民族共生を求めて活動したスロコフスキの現状分析・提言について検討を行った。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 5 The role of mediator in building solidarity of national minorities: the Jews and the European Nationality Congress 1925-1933. | 単独 | 2019年<br>2月23日 | ポーランド学術高等教育省「人文学の発展のための国家的プログラム採択研究」<br>国際学術ワークショップ<br>ヴロツワフ大学歴史研究所<br>(ポーランド) 13番ホール | 1925年から38年まで存続し、戦間期のヨーロッパ諸国の少数民族の代表たちが、それぞれの抱える問題と民族的な諸権利の獲得ために、情報を交換し、議論を交わし「ヨーロッパ民族会議」においてドイツ人グループ、ポーランド人グループとともに会議の中核をなし、ドイツ人、ポーランド人対立の構図の中で調停役を演じたユダヤ人グループの行動と論理について考察を行った。 |
| 6 A long road to Italy: The Odyssey of the Polish warriors during the Second World War. | 単独 | 2020年<br>2月21日 | カタルーニャ研究院 & 地中海ヨーロッパ研究所 第3回国際会議「地中海の都市：人々の流れと移動」<br>カタルーニャ研究院本部会議室<br>(バルセロナ) | カタルーニャ学術院が中心となって実施されている国際共同研究の一環として開催された学術会議「地中海の都市：人々の流れと移動」に参加し、第二次大戦中、ソ連から中央アジアを経て中東、地中海沿岸へと移動し、その後イタリア戦線で連合国の一員として同国の解放に寄与したポーランド軍について、地中海地域における人の移動や現代ポーランドにおける国民的記憶の問題などと絡めながら報告を行った。 |
| （国内学会発表） | | | | |
| 1. ローマン・ドモフスキの国家構想 | 単独 | 1987年<br>9月26日 | 東欧史研究会例会<br>法政大学 | ポーランド・ナショナリズムの始祖とされるドモフスキにおける国家観の変遷を、彼の主要な著作の中に探り、検討を加えた。 |
| 2. ローマン・ドモフスキの政治思想 | 単独 | 1988年<br>10月8日 | 西洋近現代史研究会<br>青山学院大学 | 19世紀末から20世紀はじめにかけての時期におけるドモフスキの政治思想の展開を、分割諸国の対ポーランド政策の変容、民族的覚醒をすすめる旧ジェチポスポリタの領域に居住する非ポーランド系諸民族の動向、南アフリカ戦争の勃発など、内外の諸契機との関連の中で考察した。 |
| 3. 戦間期ポーランドの議会政治と少数民族問題 1919～1926 | 単独 | 1993年<br>5月15日 | 日本西洋史学会<br>第43会大会<br>現代史部会<br>愛媛大学 | 第一次世界大戦後に独立を回復したポーランドは、人口の3分の1が非ポーランド系の住民によって占められるという多民族国家であった。本報告では、ポーランド政府の少数民族に対する政策をめぐる議会での論争について検討を行った。 |
| 6. 「ヨーロッパ史」と「国民史」の相克: ポーランド語版『ヨーロッパの歴史』について | 単独 | 1995年<br>7月1日 | 東京学芸大学<br>海外子女教育センター国際教育課程統合プロジェクト第13回研究会<br>東京学芸大学 | 東欧諸国の中でいち早く自国語版を刊行したポーランドの事例を取り上げ、ポーランド語版と独語・仏語の両原版との綿密な比較から得られた結論について報告を行った。とりわけ、ポーランド語版にはポーランド国民史の立場を色濃く反映する修正が施されていることを指摘した。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 7. 帝政ロシア第三国会におけるポーランド人の活動とその背景 | 単独 | 1997年<br>6月12日 | 北海道大学スラヴ研究センター重点領域研究CO2班「地域と地域統合の歴史認識」<br>北海道大学スラヴ研究センター | 帝政ロシア第三国家におけるポーランド人議員の動向を、国会における議論だけでなく、ネオスラヴ主義の展開など、当時の政治思想の諸潮流の動向も含めたより広い文脈の中での検討を試みた。 |
| 8. ドモフスキのイタリア訪問とピウスツキの「ワルシャワ進軍」：戦間期ポーランド議会政治の躓き | 単独 | 1999年<br>12月11日 | 駿台史学会<br>1999年度大会<br>明治大学 | 戦間期ポーランドの議会制民主主義が崩壊していく過程を、一方ではローマン・ドモフスキによるイタリア訪問とファシズムへの傾斜、他方ではユーゼフ・ピウスツキの議会嫌悪とクーデタの敢行、というふたつの出来事を並べて考察することによって説明しようとした。 |
| 9. ポーランドの独立とユダヤ人問題 | 単独 | 2004年<br>10月31日 | 日本スラヴ東欧学会<br>東京工業大学 | 第一次世界大戦終結直後のポーランドでは、近隣諸国・諸民族との戦争や抗争が続く中で、ユダヤ人住民に対するポグロムが各地で頻発した。欧米のユダヤ人諸団体がポーランド批判のキャンペーンを展開する中、1919年には英米ふたつの調査団がポーランドを訪れ、ユダヤ人の実態を検証して回り、それぞれ報告書を自分の政府宛てに提出した。本報告では、これらの調査報告書を手がかりとして、ポーランド・ユダヤ史にとって大きな節目ともなった1919年の経験のもつ歴史的意味について考察を行った。 |
| 10. ポーランドの戦没者慰霊をめぐる諸問題 | 単独 | 2015年<br>6月27日 | 「現代的および世界史的視点からみた日本の戦没者慰霊に関する総括的研究」（科学研究費A 研究代表者：檜山幸夫）研究会<br>中京大学社会科学研究所 | カチンの森事件、ワルシャワ・ゲットー蜂起、ワルシャワ蜂起という、ポーランド現代史上の重大事件は、第二次世界大戦後の冷戦構造の中で、公然とした慰霊活動が容易には認められなかったが、冷戦の終結とともに慰霊のあり方は大きく変貌しつつある。本報告では、「歴史を記憶」することの意味と問題性をポーランドの事例から検証を試みた。 |
| 11. 安井教浩『リガ条約』(群像社 2017年)合評会　リプライ | 単独 | 2018年<br>9月8日 | 東欧史研究会<br>早稲田大学早稲田キャンパス | 本書は、ポーランド・ソ連国境を定めたのみならず、戦間期ヨーロッパの政治地図を最終的に確定したリガ条約（1921年3月）条約について、国際関係の動向といったマクロな視点と、国境線周辺地域に暮らす人々や諸民族の動きや思いといったミクロな視点を交錯させて論じた研究である。国際関係史、国際人道史の専門からの本書についての論評に対してリプライを行った。 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 12. ポーランドの領土画定とソヴィエト・ポーランド戦争 | 単独 | 2022年2月19日 | 「シベリア出兵と東アジア国際環境の変動」研究会（科研費B 研究代表者：兎内勇津流 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）<br>日本大学文理学部 | シベリア出兵をめぐる共同研究の一環として、シベリア出兵当時のヨーロッパ側における状況に光をあてるべく、ソヴィエト・ポーランド戦争(1919-1921年)の展開をポーランド領土の確定過程の観点から論じた。 |
| （演奏会・展覧会等） | | | なし | |
| （招待講演・基調講演） | | | | |
| 1. 両大戦間期ワルシャワの政治文化：ユダヤ人との共生と反ユダヤ的風潮のはざまで | 単独 | 2007年12月1日 | フォーラム・ポーランド2007年度大会テーマ：「ワルシャワをめぐって」<br>駐日ポーランド大使館 | ユダヤ人口の多さゆえに、しばしば反ユダヤ的な風潮に染め上げられたワルシャワの政治文化について、ともに大きな反ユダヤ騒擾を惹起することになった1912年のロシア国会選挙と1922年の大統領選挙後の首都の様相について比較検討を試みた。 |
| 2. ポーランド・シオニズムの統合問題：1920年代を中心に | 単独 | 2012年5月26日 | 日本ユダヤ学会公開シンポジウム「中東欧の国民国家とユダヤ人」<br>早稲田大学戸山キャンパス | ユダヤ人におけるポーランド分割の残滓とも言うべき、シオニストの旧分割領ごとの分裂状態に終止符を打ち、ポーランド・シオニストの結集をはかるべく、1920年代を中心に幾度となく試みられ、挫折した統合の動きを考察した。 |
| （受賞（学術賞等）） | | | なし | |

研　究　活　動　項　目

| 助成を受けた研究等の名称 | 代表，分担等の別 | 種　類 | 採択年度 | 交付・受入元 | 交付・受入額 | 概　　要 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （科学研究費採択） | | | | | | |
| 1. 両大戦間期ポーランドにおける政治的シオニズム運動の展開と変容に関する研究 | 研究代表者 | 基盤研究C | 2004年4月～2007年3月 | 長野県短期大学 | 2,500千円(直接2,500千円) | |
| 2. 戦間期ポーランドにおける議会政治と民族的少数派 | 研究代表者 | 基盤研究C | 2010年4月～2013年3月 | 長野県短期大学 | 3,500千円(直接2,700千円、間接810千円) | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3. 1930年代のポーランドにおけるシオニズムの思想と行動 | 研究代表者 | 基盤研究C | 2015年4月～2018年3月 | 長野県短期大学 | 3,640千円(直接2,800千円、間接840千円) | |
| 4. 世界史的視点からの国民国家における戦争記憶の記録化と戦後社会の構築に関する研究 | 共同研究者 | 基盤研究B | 2017年4月～2021年3月 | 中京大学 | | |
| 5. 戦間期ヨーロッパにおける少数民族問題とヨーロッパ民族会議の展開 | 研究代表者 | 基盤研究C | 2019年4月～2022年3月 | 常磐短期大学 | 4,290千円(直接3,300千円、間接990千円) | |
| 6. ヨーロッパ民族会議と1930年代ヨーロッパ国際関係 | 研究代表者 | 基盤研究C | 2023年4月～2026年3月 | 常磐短期大学 | 4,680千円(直接3,600千円、間接1,080千円) | |
| (競争的研究助成費獲得(科研費除く)) | | | | | | |
| 1. 1989～90年革命の展開に伴う東欧地方社会の変容に関する研究 | 研究分担者 | トヨタ財団1992年度研究助成研究 | 1992年4月～1996年3月 | 千葉大学 | | |
| 2. Cohesion Building of Multiethnic Societies 10th - 21st Centuries | 研究分担者 | ポーランド学術高等教育省「人文学の発展のための国家的プログラム採択研究」 | 2014年～2019年 | ヴロツワフ大学 | | |
| (共同研究・受託研究受入れ)<br>1. | | | | | | |
| (奨学・指定寄付金受入れ)<br>1. | | | | | | |
| (学内課題研究(共同研究))<br>1. | | | | | | |
| (学内課題研究(各個研究))<br>1. | | | | | | |
| (知的財産(特許・実用新案等))<br>1. | | | | | | |